

---

---

連続爆弾事件を通してみたロンドンの安全な街づくり

日本女子大学教授 清永賢二

一．イギリスの安全

ロンドンを中心に、今、イギリスは経済的好況に乗っている。しかし、その背後に、かつて我が国が落ち込んだ「バブルの風」が忍び吹いていることも事実だ。犯罪という社会の底部を映し出す窓は、正直にそのことを表わす。

ロンドンの繁華街の一つであるトッテナム・コート・ロードに行き、電話ボックスに入ってみる。中は、全面「援助交際ちらし」だらけだ。少なくとも、１０年前には考えられなかった。日本の若い女性の写真も少なからず混じる。この光景は、まさに、日本がバブルに浮かれていた時の状況そのものだ。

しかし、最近の経済的豊かさが、イギリスの犯罪増加に停止を掛け、さらには減少傾向を生み出していることも事実である（図１）。円屋根ドームのような犯罪発生のカブが、このことを鮮明に表わす。現首相トニー・ブレアも、犯罪からの安全がいかに進んだかを国内の様々な場でのアピールに盛り込む。

しかし、ごく最近の平成11（1999）年4月17日の土曜日。夕刻5時26分。ロンドンには爆発した。連続「釘爆弾（Nail Bomb）」事件の皮切りになった爆発だ。

この事件は、単なる事件ではなく、注意して見る者だけに分かる、犯罪とその防止に関わるイギリスの隠れた様相を一瞬ではあるが鮮明に照らし出した。

事件は、その後、犯人検挙で一応の解決は見た。しかし、事件に学ぶを鉄則とするならば、私たちは、今こそ、このロンドンにおける事件を様々な角度から再検討する必要がある。急激な高度国際化社会の進展の下で、今日のロンドンの状況は、明日の東京さらには日本全体の状況として引き付け捉えておかねばならない。

二．事件の概要

同一犯人によると言われる釘爆弾事件は、連続して3件発生した。

一番最初に4月17日にブリックストン地区で爆発し、次いで1週間後の24日にブリックレーン地区で、そのまた1週間後の30日にはソーホのバブでと連続した。最後のソーホの爆発では、一瞬にして即死状態の者3名、重軽傷の者65名を出すまでに至った。

これら3つの事件現場に共通していたことは、いずれも「マイノリティ」と呼ばれる社会的勢力の弱い人間の集まりがさらに凝縮させられた小空間で、ブリックストン地区がカリビアン（カリブ諸島出身者）、ブリックレーン地区がアジア（バングラデッシュ）

、そしてソーホのpubがゲイの集まりの場所であった。

こうしたある意味で異文化なコミュニティに対しては、従来から極右勢力が攻撃の対象としてきた。いわゆるレーシスト（差別主義者）によるレーシズムに基づく攻撃である。ここで一挙に、人種問題を中心に隠されてきた差別問題に連続釘爆弾が結びついて行く。

これを煽るようにホワイトウルブスやコムバット18と名乗る極右勢力らしき者からの匿名の実行電話や手紙が新聞社や警察に来る。

「ある筋からの情報」として、アメリカの最近の極右テロのように、一匹狼的極右テロではないか、という噂も飛び出る。

新聞社自身が犯人情報に懸賞金を出す。

左翼を中心としたレーシストへの抗議デモが発生する。

地下鉄に爆弾を仕掛けたという電話が入り、スコットランドヤードが防弾チョッキ付で乗り出す。

そうこうしている内に、人気テレビ番組「クライム・ウォッチ」の花形スタッフであるジル・ダンドが26日の午前11時に1発の銃弾で頭部を粉砕され暗殺されるという事件まで引き起こって来る。犯人は誰か？探しが始まり、ストーカー説、コソボから派遣の暗殺者説、テレビ報道された犯罪者の復讐説、振られたボーイフレンドの憎しみ説等が出回った。

何処で起こるか分からない爆弾の炸裂、人種差別、女性の殺人等が絡まりあい、昏迷は深まった。社会の動揺も広がって行く。

しかし、この昏迷の中に、普段は覆い隠され見え難くされているものが、昏迷であるからこそ次々に眼前に姿を現わして来た。

本稿では、その見えてきたものを取り上げ紹介しよう。

### 三．ブリックストン・環境設計による隠れた犯罪防止実験エリア

#### ブリックストン

今回の一連の連続釘爆弾事件の最初の爆発地であるブリックストンに、ともかく行ってみよう。

地下鉄ピクトリア線に乗る。グリーンパークを経てテムズの川底を通り、最後のどん詰まりがブリックストン駅だ。地下鉄の階段を登り地上に出る。

そこには、ロンドン市内とは思えぬ原色の人々の渦が溢れ溜まっていた。果物と肉の甘酸っぱい匂いが軒先にまでこれでもかとはばかりたち込め、下町の人々の喧騒染みた大声が行き交う。

元首相のジョン・メイヤーも幼い頃をここで過ごした。元首相が生活していたからといって、ブリックストンが品の良い街であると決して思っていない。ほんの10

年前まではロンドン最高の犯罪危険地帯といわれた。何よりも1981年に、都市ロンドンの歴史で最大といわれる暴動が発生した街だ。川向こうの人は、車で通り過ぎても首をすくめた。自殺したければブリックストンだ。

しかし、経済的繁栄は、確実にこの街を変えた。その日暮らしの人々が僅かな食材を求めたかつての市場は、その異色性が特徴となり、観光客を交えた国際バザールとなった。犯罪からの危険性そのものが商品となり、「ブリックストンに行ったのよ」が若者のささやかな冒険心をくすぐるファッションとなりつつある。

人々がブリックストンを受け入れる最大の理由は、ここがかつてのブリックストンではない、安全な街なのだ、という共通感覚が川を越えて広く醸成されたことによる。

背後には、この街を安全にするための、大胆で緻密な計画的試みがあった。

#### エレクトリック・アベニュー

この通りで「釘爆弾 (Nail Bomb)」が最初に爆発した。爆弾の中に大きな釘が大量に埋め込まれて、爆発と同時にその釘が四方に吹き飛んでゆくから「釘爆弾」だ。

死者なし。重軽傷者23人。重傷者である青年の頭部には長さ4インチ(約10.2センチ)の釘がぶち込まれた(写真1)。

現場は、地下鉄駅を出て大通りのブリックストン・ロードを左手に歩き、ものの20メートルほど先でエレクトロニクス・アベニューが突き出て作る三叉路の角。正確には、エレクトリック・アベニューに3メートルほど入った地点だ。

スコットランドヤード発表。決定的な目撃者、証拠物件なし。

事件発生後、爆発現場となったエレクトリック・アベニューを中心に丹念に歩く。首筋に視線を感じてならない。しかし、注視している者は誰もいない。

大通りのブリックストン・ロードの両側に、およそ15メートル間隔で街路灯のポールが5本並ぶ。その街路灯の上に小さい箱がある。写真機の望遠を向け拡大して見る。横に居た警察官があからさまに嫌な顔をする。

高くて目では視認し難いが、超小型テレビカメラ(CCTV)だ(写真2、3)。この超小型カメラに混じって、街頭の要所に小型カメラが設置されている。

街路灯に設置されているということは、この街の中心エリアを形成するエレクトリック・アベニューの市場内にも、何ほどこかのカメラが設置され、被疑者像をキャッチしているはずだ。

何が決定的な証拠はなしだ。しかし、そのカメラはどうしても発見できない。

#### 被疑者を捉える凝視するメカニカル・アイ

その後も釘爆弾は連続して破裂する。ソーホでは、片足が吹き飛んだ。

しかし、この間の4月29日にスコットランドヤードも決定的なテレビ映像をレリー

スする。非常に高い確率で犯人と判断される若い男性の行動状況のモニター画面だった（写真4）。野球帽の色から本人の顔つき、背丈、年齢、人種まで全てが夜の一般テレビに写った。同時に「この男性は必ずあなたの隣りに居る」のキャンペーン。

この連続事件を部外者として追いかける者にとっては、一番の興味は、写真4を写したテレビカメラが何処に設置されていたかだ。写真4の角度から、カメラのセッティング場所を探す。しかし、目に入らない。写真機の角度を固定し、望遠レンズを拡大して行く（写真5、6）。市場の人々から、カメラを無作法に撮る不審者への不躰な視線が投げられる。

「あった」。

何と街路灯に付けられていたカメラよりも、数倍は高性能と思われる超大型ビデオカメラが、はるか50メートルも先の市場の屋台のテントやそのスカートに隠されるように設置され、この市場の出入り口、即ち、爆弾の破裂したブリックストン・ロードとエロクトリック・アベニューが作る三叉路のそのピンポイントに焦点を合わせていた。

しかし、三叉路角から見たカメラは、小さな点でしかない。

凄いと思うね、この写真は。これだけ写されてたら捕まるよ。

（皿売りのM. Sumida氏。52歳）。

こうしたカメラで追いかけるということについては、どう思う（筆者）。

何だかんだと言っても、捕まえなくっちゃ。ここの評判がまた悪くなって、商売が上がったりになったら、どうしようもない。警察は、よくやった。

（5月2日午後3時。ブリックストン）

被疑者は、この映像を基にした情報提供により、第3のソーホ・パブ爆発事件のすぐ後にあっけなく逮捕された。

#### 環境設計実験地区・ブリックストン

もう一度、第1の爆発現場であるブリックストンに戻り、テレビカメラの設置状況を見てまわる。

配置されたカメラ群の特徴は、公共空間に超小型、中型そして超大型のカメラが極めて効果的にセットされている、ということだ。さらに、この効果は、商店が自己防御のために自費で設置した小型カメラで強化される。

まず設置位置について見てみよう（図2）。

超小型カメラは、カメラの足元の光景を固定して写す。超小型であるだけ、市民の不愉快感は低減する。しかし、カバーする空間が狭く死角が生じる。この欠点を大型と超大型カメラが補強する。

中型カメラは、三叉路の角と街路の交差するコーナーに設置されている。コストの問題もあり、超小型カメラに比べ設置台数は少なくなる。カバーする空間は、中型であるだけに広がり、要所をしっかりと押さえる。しかし、市民の視界には入りやすく、不愉快感情には触れやすい。また、いかに中型とはいっても固定されている上に、カバーする空間にも穴が開く。この欠点を超大型カメラが克服する。

超大型カメラは、台数は非常に少ない。しかし、それだけ解像力に優れている。また、浮動式で背後に人間（警察官が常時観察（複数台数ではあるが）している）の存在があること、極めて遠隔から対象を捉える能力を持っていること等から、潜在的犯罪者には威嚇効果、実際の犯罪実行者には撮られていることを意識させずに極めて遠距離から映像化し確かな資料が確保できる、という利点を持つ。

1つのカメラが破壊されても、その背後を複数のカメラが、近距離から遠距離から、視界の範囲内あるいは範囲外から補完する。

犯罪を実行するなら、しても良い。しかし、我々は、確実に君を逮捕するぞ、という仕組みが構築され、現在のブリックストンの安全を生み出している。

どう、あの頭の上のカメラ気になる。（筆者）。

関係ないよ。それよりも、警察が直接入って来るよりかは良いし、あれがあるお陰でこの安全性も高くなり、商売が上手く行くようになったから、私は良いと思うよ。

（前述の皿売りR.Sumida氏。5月8日午後2時。ブリックストン）。

#### 防御から攻撃へ

連像爆弾事件全体を振り返ってみて、第3のソーホ・パブ爆殺事件まで発生させてしまったという厳しい評価が有るかも知れない。しかし、どう言われようと、被疑者を捕まえないければどうしようもない。

街頭に設置されたビデオカメラ群、正確に言えば複数のカメラを組み合わせたシステムが、犯人逮捕の最大の功労者であったことは間違いない。

単体としての自己防衛的「防犯」カメラではない。もっと積極的な役割の達成がテレビカメラに期待され初めている。

そのため最大の効果を発揮するよう緻密に計画された複数のビデオカメラによる、地域安全と地域の経済的繁栄維持を目的とする「攻撃」的ビデオカメラ「システム」が、今、ここロンドンだけでなくイギリスの問題地区の「公共空間」に設置されつつある。

例えば、日本でも、市民安全の確保が厳しい一部の歓楽街等には、こうしたイギリスの環境設計による防犯手法モデルの導入も将来的には十分考えられよう。

### 三．環境設計による犯罪防止を成り立たせる社会的合意

連続釘爆弾事件は、観光客でにぎわうロンドの街並みが、テレビカメラの視線という壁で囲まれた「守りやすい」新城塞都市であることを確認させてくれた。それと同時に、また、釘爆弾事件は、私たちに「安全に生活する」ための人々の生き方、市民一人一人に自覚された「安全哲学」の在り様についても考えさせるものを提示した。

その中で、日本の現状に引き付けて三つの課題を取り上げてみたい。

#### 私たちの「公共」概念の再検討

日本であるならば、ブリックストンの様にカメラ・システムを張り巡らすことには、大きな抵抗が生じるに違いない。少なくとも、私たちの感覚では「人権問題」に抵触すると思われぬ。しかし、その「人権の国」あるいは「自覚された個人主義の国」と伝わるイギリスで、ブリックストンだけではない、様々な空間にセキュリティ・カメラが導入されている。

暗殺されたジル・ダンドの最後の一日の内、家を出た後の公共空間での行動は、複数のビデオフィルムを洗うことでほとんど再現された。

繰り返された大戦を身を持って生きた経験、IRAによる無差別爆弾テロの恐怖について最近まで脅えていた経験等が背景に在るのかもしれない。しかし、それだけでは説明できない、個人の精神の在り様の違いをイギリスと日本の中に感じてならない。

ブリックストンで皿売りをしているM.Sumida氏は、前述の5月8日のインタビューの後に続けて、こういった。

どうしてここにカメラをセットしても良いの（筆者）。

皆の空間（PUBLIC SPACE）だよ、ここは。そんなの考えることじゃないよ。

（R.Sumida氏。5月8日午後2時。ブリックストン）。

おそらく様々な意味を持つであろう安全に関わる「公共」（PUBLIC）の意味と作用を、私たちは、もう一度、再検討する必要があるのではないだろうか。少なくとも、時間を掛けて研究する必要は十分にある。

簡単に答えは出ない。しかし、複雑化する日本社会の中で、市民「安全」の確保のため、従来とは異なる「公共」理解の必要性と重要性が、現実問題解決の具体的な鍵言葉として浮上して来るに違いない。

#### 国際化社会への対応

今回の釘爆弾事件で、マイノリティと表現される異文化の下で生きる人々の間に、非常に強い緊張が走った。彼らのコミュニティには自警的行動集団も生まれた。かつては、

こうした自警的行動集団が一挙に暴動に走った。

しかし、徐々にではあるが、彼らの生活環境の改善、小学校から始まる市民教育の徹底（今年度に発表された新カリキュラムでは、11歳から「人種と世界のコミュニティ」というのが柱の一つとなっている）そして経済的豊かさの進行等があるが、揺れ動きはあるが、イギリスを構成する市民としての落ち着きが進行している。

しかし、それでもブリックストンの安全対策に見るように、かなり強固なシステムを導入しておかねばならない状況が現在も続いている。異なった文化が、肩を擦りあって共存して行くのは、本当に難しい。

日本においても、経済のグローバル化に伴い、さらに一層、国境を越えた人の移動と定着化（合法、非合法を含め）が進行している。日本が経済的に現状からさらに進展を望むなら、こうした動きは止められないだろう。むしろ、非常に膨張した動きが生じることを覚悟しておかねばならない。

既に、東京を中心に、イギリスでは「コミュニティ」と表現されるほどの「新しい集落」空間が数多く形成されている。

こうした空間の安全対策をいかにしっかりと確立しておくか、が今こそ重要な課題であると考えられてならない。問題が生じてからでは遅い。少しずつゆっくりと、確かな安全確保策を、今から構築しておく必要があるだろう。

#### 「安全エートス」の確立

ともかく、これまでのIRAの組織を背景にした明確に意識されたテロ等とは異なった今回の連続釘爆弾事件は、イギリスを震え上がらせた。

スコットランドヤードだけではなく、様々な警察機構、内務省や運輸省関係、MI5、さらにはアメリカのその種の機関までもが事件解決に動いたという報道がある。おそらく事実であろう。

体制の総力を挙げた取り組みが、早期解決に結びついたことは間違いない。極めて短期間に、これだけの組織を纏め上げ、被疑者検挙に結び付けていった組織力と、その組織がいつでも作動することが可能にしている危機管理手法についても、研究する必要があることを痛感する。

それと同時に、こうした国民的な危機的状況に対しては、甘い評価や評論など一切することなく、毅然と向かって行くマスコミ、市民の精神形成についても、私たちは学ぶべきもののあることを知った。

チャールズ皇太子は、ソーホの爆弾事件現場を訪れて言った。

この爆弾は、私たち全体に向けられたものと覚悟しなければならない。自分たちのできることで、一緒に、傷ついた人々を助けよう。私たちは、この（爆発の悲惨な）現実をしっかり踏まえねばならない。（The Independant, 5月4日）。

犯罪からの安全確保は、口先で出来ることではない。市民一人一人の行動によってのみ達成される。しかし、その行動は、そうした行動を支える精神（Ethos）によって支えられ強化されることも間違いない。それは、やはり、市民としての義務に関する幼い頃からの教育に関わって行く。

#### 四．終わりに

イギリス・ロンドンの連続釘爆弾事件は、最後に子どもの教育に辿り着く。の

先に掲げたイギリスの新カリキュラムには、13の主な柱があり、その中の「市民の資格（Citizenship）」という柱において、11歳から14歳の年齢の子どもの学ぶことに「法と人間の権利そして責任」がある。そして、このことを学ぶために、これに先立って、5歳から7歳の子どもでも「良いこと、悪いこと」をまず学ぶことが明記されているのである。

こうした教育の上に、チャールズ皇太子の言葉は国民の間に大きな共感を持って受け入れられ、危機解決に向けての国民的一致の姿勢が生まれ、爆弾が仕掛けられたという偽情報にも動ぜず何十分もじっと地下鉄入り口で待ち、今日もまたイギリスは確かな日常生活を営んでいるのである。

我が国の子どもたちの教育も、今、犯罪からの市民安全に積極的に取り組む市民育成という視点に立った視点からの理想と現実とを橋を架ける生きた勉強を盛り込む時が来たと思われてならない。